

デジタル社会を生きるこどもたちと どう向き合うか

野崎浩平 / 土佐塾中学高等学校 教育DX担当

- 1.自己紹介
- 2.変化の中にいる子どもたち
- 3.学校現場における使われ方
- 4.求められる力の変化と現場の実践
- 5.AIを前提とした授業設計
- 6.“手触り感”のある学びとAI
- 7.リテラシーは誰が担うのか

自己紹介

野崎浩平 のざたん

大阪生まれ 横浜育ち 高知在住

土佐塾中学・高等学校 理科教諭

一般社団法人ハンズオン代表理事

「会いに行けるセンセイ」

Voicyパーソナリティ

LEGO®SERIOUS PLAY®メソッドと教材活用

トレーニング修了認定ファシリテータ

Teacher Canvassador

NewsPicks認定エキスパート など

プロフィールはこちらから



教育ICT環境の変遷

- ・2000年代 情報教育スタート
 - ・2010年代 プログラミング教育開始
-
- ・2019年～ GIGAスクール構想で1人1台端末へ
 - ・2020年～ コロナ禍によるICT環境の急加速

学校・教室にどうやって
コンピューターを導入しよう

生徒が授業中に使うことを
どのようにデザインしよう

地域間格差 繼続的な環境整備 リテラシーの課題 など
これまでにはなかった課題

|人|台は当たり前になり…

- 調べ学習の一般化と“情報収集力のコモディティ化
 - インターネットが使えることは日常に
- 資料作成スキルの標準化
 - スライド、フォームの作成は誰でもできる状態
- 個別最適化のインフラは整った
 - 「一人ひとりにあった学び」は可能になった

|人|台は当たり前になり…

- 調べ学習の一般化と“情報収集力のコモディティ化
 - 「何を調べたか」より「何を問うたか」へ
- 資料作成スキルの標準化
 - 誰に・何を・どのように、伝える・まとめるとか
- 個別最適化のインフラは整った
 - 進度が揃わないことに対する不安

「答える」から「問い合わせる」へ

「これまで」

情報収集が中心
(Google検索／教科書要約)
正解を求める学び
「調べた→まとめた」で完結

正しいとされる解が問われる

「これから」

複数の視点や事例に置き換える
本質的な問い合わせを見つける
調べた事例と実社会とをつなげる

それぞれの解釈が問われる

個別最適化をどうするのか

従来の授業設計

教員が採点・評価 → 時間がかかる

フィードバックの即時性が低く、学習改善のタイミングが遅れる

一斉指導が基本

AI活用を前提とした授業設計

AIによる採点・コメント生成
生徒が自分の理解度を即時に確認可能

教師はより“深い学び”へのサポート

個別最適な課題提示・教材推薦も可能

AIを前提とした授業設計

サンプル文章

I have a good **idea**. **This** is my new **school** **project**. Many **people** want to know about the **environment**. **We** **study** it in **class** **every** day. **Students** **read** books **and** **write** **about** what **they** **learn**. Some take **pictures**, **others** make **posters**. We also talk and **work** **together**. Our **teacher** says, “Try your best!” **At** the **end**, **we** **show** **our** **work** to the class. **Everyone** is happy, **and** we **feel** proud.

00:00:00 / 00:00:32



Good



🔊 発音

65%

よくできています！あなたの発音は、多くの人が理解できるほど正確です。スコアを上げるには、苦手な単語を練習して75%以上を目指してください。

哱 イントネーション

73%

全体的に、イントネーションについてはよくできています。テキストを見直して、もっと力強く言えるところを見つけて、より表現力豊かなリーディングを目指しましょう。♪♪

〰 流暢性

85%

あなたの音読の速さは 128 wpm (語/分) です。これは音読において聞き手が理解しやすいスピードレベルです。よく出来ましたね 🙌

6 “手触り感”のある学びとAI

“実感”が伴わう学びのデザイン

調べる・発表するだけでなく
「手を動かす」「さわってみる」「やってみる」の時間の創出を

子どもだけでなく、大人もリテラシーが必要

保護者、教員、地域——誰が担うのか？

「わからないことをわからないままにしない」大人の姿勢が鍵